

日本の詩歌

14

萩原朔

中央公論社

萩原朔太郎

昭和43年 1月13日初版発行

昭和45年 6月1日再版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

月に吠える	5
青猫	79
蝶を夢む	172
萩原朔太郎詩集	228
定本 青猫	260
純情小曲集	273
氷島	306
散文詩	338
未刊詩篇	376

詩人の肖像

鑑賞

年譜

カット

福永武彦

伊藤信吉

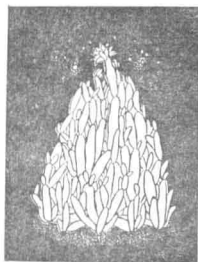
田中恭吉

恩地孝四郎

萩原朔太郎

月に吠える

従兄 萩原栄次氏に捧ぐ



序

詩の表現の目的は単に情調のための情調を表現することではない。幻覚のための幻覚を描くことでもない。同時にまたある種の思想を宣伝演繹することのためでもない。詩の本来の目的は寧ろそれらの者を通じて、人心の内部に顫動する所の感情そのものの本質を凝視し、かつ感情をさかに流露させることである。

詩とは感情の神経を掴んだものである。生きて働く心理学である。

すべてのよい叙情詩には、理窟や言葉で説明することの出来ない一種の美感が伴ふ。これを詩のほひといふ。(人によつては気韻とか気象とかいふ)

『月に吠える』は大正六年二月刊行された。萩原朔太郎の第一詩集である。収録作品五十六篇(このうち一篇は無題)。その大部分は大正三年九月から、六年二月にかけて、数種の雑誌に発表された。

作品のほかに自序並びに「詩集例言」があり、これに北原白秋の序文、室生犀星の「健康の都市」と題する跋文がある。装幀は恩地孝四郎が担当し、田中恭吉十一枚、恩地孝四郎四枚のカバー・表紙・口絵・扉・挿絵類が挿入してある。当時としてはかなり豪華な異色ある造本だった。

巻末に田中恭吉、恩地孝四郎の「挿書附言」という文章があり、萩原朔太郎の「故田中恭吉氏の芸術に就いて」がある。感情詩社、白日出版部共刊の形による自費出版だった。

本巻には作品全部を収録した。

にほひは詩の主眼とする陶酔的気分の要素である。順つてこのにほひの稀薄な詩は韻文としての価値のすくないものであつて、言はば香味を欠いた酒のやうなものである。かういふ酒を私は好まない。

詩の表現は素樸なれ、詩のにほひは芳純でありたい。

私の詩の読者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や「ことがら」ではなくして、内部の核心である感情そのものに感触してもらひたいことである。私の心の「かなしみ」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」その他言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによつて表現する。併しリズムは説明ではない。リズムは以心伝心である。そのリズムを無言で感知することの出来る人とのみ、私は手をとつて語り合ふことができる。

『どういふわけでうれしい？』といふ質問に対して人は容易にその理由を説明することができる。けれども『どういふ工合にうれしい』といふ問に対しては何人もたやすくその心理を説明することは出来ない。

思ふに人間の感情といふものは、極めて単純であつて、同時に極めて複雑したものである。極めて普遍性のものであつて、同時に極めて個性的な特異

詩集の発売禁止

市中の書店で発売された『月に映える』の初版本には、詩集のほぼまん中辺のところに、

「その筋の注意により、『愛憐』『恋を恋する人』の二篇（一〇三頁より一〇八頁）までを削除す」という断り書が刷りこんであり、当該ページが無残に切り取られてゐる。この詩集は危うく発売を禁止されようとしたのである。

太平洋戦争以前の検閲制度においては、すべての刊行物は発行日の三日前までに、内務省へ納本することになっていた。そして内務省警保局では、不適當と認める刊行物を発売禁止処分に付したわけだが、『月に映える』はその検閲により、集中の二篇が風俗壊乱に該当するということで、発売禁止の内達を受けたのである。

内達は白日社へとどいた。そこ

なものである。

どんな場合にも、人が自己の感情を完全^{かんぜん}に表現しようと思つたら、それは容易のわざではない。この場合には言葉は何の役にもたたない。そこには音楽と詩があるばかりである。

私はときどき不幸な狂水病者のことを考へる。

あの病氣にかかつた人間は非常に水を恐れるといふことだ。コップに盛つた一杯の水が絶息するほど恐ろしいといふやうなことは、どんなにしても我我には想像のおよばないことである。

『どういふわけで水が恐ろしい？』『どういふ工合に水が恐ろしい？』これらの心理は、我々にとつては只々不可思議千万のものと**いふの外はない**。けれどもあの患者にとつてはそれが何よりも真実な事実なのである。そして此の場合に若しその患者自身が……何等かの必要に迫られて……この苦しい実感を傍人に向つて説明しようと思ふならば（それはずるぶん有りさうに思はれることだ。もし傍人がこの病氣について特種の智識をもたなかつた場合には彼に対してどんな惨酷な悪戯^{いたづら}が行はれないとも限らない。こんな場合を考へると私は戦慄^{せんりつ}せずには居られない。）患者自身はどんな手段をとるべきであらう。恐らくはどのやうな言葉の説明を以てしても、この奇異な感情を

で感情詩社名義人ということで室生犀星が警保局へ出向き、二篇の詩を削除することにして、からくも発売を許可された。このため前記の断り書を刷りこみ、製本のやり直しをした。こうして初版詩集は検閲の傷を受け、著者の憤懣を秘めて刊行された。

この時、萩原朔太郎は、生地の前橋市で刊行されている『上州新報』に「風俗壊乱の詩とは何ぞ」と題する抗議文を發表した。次の文章がその要点である。

「私の詩集『月に吠える』は二十一日になって、突然発売禁止の傳達を受けた。その理由は集中のある一、二の詩篇に、風俗を壊乱するものがあるというのだそうだ。

当時、私は鎌倉にいたので、東京の前田夕暮君から電話でこの急報に接した時は、まるで意外の感にうたれて夢のような気がした。

表現することは出来ないであらう。

けれども、若し彼に詩人としての才能があつたら、もちろん彼は詩を作るにちがひない。詩は人間の言葉で説明することの出来ないものまでも説明する。詩は言葉以上の言葉である。

狂水病者の例は極めて特異の例である。けれどもまた同時に極めてありふれた例でもある。

人間は一人一人にちがつた肉体と、ちがつた神経とをもつて居る。我のかなしみは彼のかなしみではない。彼のよろこびは我のよろこびではない。

人は一人一人では、いつも永久に、永久に、恐ろしい孤独である。

原始以来、神は幾億万人といふ人間を造つた。けれども全く同じ顔の人間を、決して二人とは造りはしなかつた。人はだれでも単位で生れて、永久に単位で死ななければならぬ。

とはいへ、我々は決してぼつねんと切りはなされた宇宙の単位ではない。

我々の顔は、我々の皮膚は、一人一人にみんな異つて居る。けれども、実際は一人一人にみんな同一のところをもつて居るのである、この共通を人間同志の間に発見するとき、人類間の『道徳』と『愛』とが生れるのである。

この共通を人類と植物との間に発見するとき、自然間の『道徳』と『愛』と

何故かというに、私は自分の詩集が風俗壊乱で罰されるというようなことは、夢の中でさえも想像しなかつたことだからだ。

*

禁止されたものは『愛憐』および『恋を恋する人』の二篇であつて、共に性慾に関する一種の憧憬およびその美感を歌つた者ではあるが、その取材といい内容といいきわめて典雅な耽美的の抒情詩であつて、どこに一つの不思議もないものである。もしもかような詩篇が風俗を壊乱するといふのなら、古来のあらゆる抒情詩の中でいやしくも恋愛に関するものは、ことごとく禁止されなければならないはずである。思うにこの標準で行くと聖書の『雅歌』や日本の『万葉集』などは、最も風俗壊乱の甚だしい詩歌にちがいない。何故彼らは聖書の発売禁止を命じないか。

が生れるのである。そして我々はもはや永久に孤独ではない。

私のこの肉体とこの感情とは、もちろん世界中で私一人しか所有して居ない。またそれを完全に理解してゐる人も私一人しかない。これは極めて極めて特異な性質をもつたものである。けれども、それはまた同時に、世界の何びとも共通なものでなければならぬ。この特異にして共通なる個々の感情の焦点に、詩歌のほんとの『よろこび』と『秘密性』とが存在するのだ。この道理をはなれて、私は自ら詩を作る意義を知らない。

詩は一瞬間に於ける靈智の産物である。ふだんにもつてゐる所のある種の感情が、電流体の如きものに触れて始めてリズムを発見する。この電流体は詩人にとつては奇蹟である。詩は予期して作らるべき者ではない。

以前、私は詩といふものを神秘のやうに考へて居た。ある靈妙な宇宙の聖靈と人間の叡智との交霊作用のやうにも考へて居た。或はまた不可思議な自然の謎を解くための鍵のやうにも思つて居た。併し今から思ふと、それは笑ふべき迷信であつた。

詩とは、決してそんな奇怪な鬼のやうなものではなく、実は却つて我々と

詩集刊行とその反響

この詩集の刊行は室生犀星中心の感情詩社と、歌人の前田夕暮主宰の白目社出版部との共同出版という形をとっているが、出版費用（三百円くらい）は自分持ちだった。つまり自費出版で五百部作製したのである。売行きは非常に好調で、短期間にその大部分がなくなつた。氣をよくした室生犀星と朔太郎は、すぐさま再版刊行を考えたが、けっきょく中止した。當時を回想して萩原朔太郎は次のようにいっている

「詩集の批評は予想以外に好評で、至るところに大喝采を博した、河井醉茗、野口米次郎、川路柳虹、高村光太郎、山村暮鳥、加藤介春、日夏耿之介ら、當時の詩壇を代表している詩人が、一斉に皆諸方で激賞してくれた。とくに詩人兼小

は親しみ易い兄妹や愛人のやうなものである。

私どもは時々、不具な子供のやうないぢらしい心で、部屋の暗い片隅にすすり泣きをする。さういふ時、びつたりと肩により添ひながら、ふるふる自分の心臓の上に、やさしい手をおいてくれる乙女がある。その看護婦の乙女が詩である。

私は詩を思ふと、烈しい人間のなやみとそのよろこびとをかんずる。

詩は神秘でも象徴でも鬼でもない。詩はただ、病める魂の所有者と孤独者との寂しいなぐさめである。

詩を思ふとき、私は人情のいぢらしさに自然と涙ぐましくなる。

過去は私にとつて苦しい思ひ出である。過去は焦躁と無為と悩める心肉との不吉な悪夢であつた。

月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである。疾患する犬の心に、月は青白い幽霊のやうな不吉の謎である。犬は遠吠えをする。

私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。影が、永久に私のあとを追つて来ないやうに。

萩原朔太郎

説家の岩野泡鳴氏の如きは、雑誌『文章世界』に批評を書き、同氏としてはかつてない最大の讃辞を述べてくれた。

山村春鳥と加藤介春の二氏は、これを日本最高の芸術とまで、最高級に讃めてくれた。当時なお健在でいた森鷗外先生にも一本を献じたところ、丁寧な手紙で礼状が来、近頃最も面白く読んだ好詩集だといつて讃めてくれた。

ただ内心少し寂しかったのは、当時僕が最も畏敬していた先輩蒲原有明氏から一言の批評も聞くことができず、詩集の受取り端書さえもらえないことであつた。しかし北原白秋氏は、僕の成功を祝して祝宴を開いてくれた（詩壇に出た頃）

この回想には部分的な記憶違いがあるが、しかしその反響はおよそこのようであつた。

竹とその哀傷

地面の底の病気の顔

地面の底に顔があらはれ、
さみしい病人の顔があらはれ。

地面の底のくらやみに、
うらうら草の茎が萌えそめ、

鼠の巣が萌えそめ、

巢にこんがらかつてゐる、

かすしれぬ髪の毛がふるえ出し、

冬至のころの、

さびしい病気の地面から、



萩原朔太郎は『月に吠える』の詩的情操について、「処女詩集『月に吠える』は、純粹にイマジスティックのヴィジョンに詩境し、これに或る生理的の恐怖感を本質した詩集であつた」（『定本青猫』自序）といったことがある。

この言葉が『月に吠える』の全作品にあてはまるとはいえないけれども、少くとも「或る生理的の恐怖感」という意識——病患についての恐怖感覚は、初期作品の多くにしみついている。ことに「竹とその哀傷」篇にその影が濃い。

「病氣というものを考えると、幽霊の幻覚を見るような恐怖をかんずる。影のような気持の悪い微笑を私の背後にかんずる」これは雑誌『感情』同人の多田不二にあてた手紙（大正五年八月）の一節だが、この恐怖感覚は『定本青猫』で述べた言葉と全く同じである。

ほそい青竹の根が生えそめ、

生えそめ、

それがじつにあはれふかくみえ、

けぶれるごとくに視^みえ、

じつに、じつに、あはれふかげに視え。

地面の底のくらやみに、

さみしい病人の顔があらはれ。

草の茎

冬のさむさに、

ほそき毛をもてつつまれし、

草の茎をみよや、

あをらみ茎はさみしげなれども、

「地面の底の病気の顔」は、標題そのものがイマジスチックであり、同時に病める肉体の傷みを思わせる。

くらやみの草の茎、鼠の巣、敷しれぬ髪の毛など、これらはすべて薄気味わるい。解くことのできない、こんぐらかったもの。そこに「病気」という不可解なものが象徴されている。その不気味なものが肉体に巣くい、神経にからみつく。この時、病める肉体は「地面の底」にはかからない。

ほそい青竹の根。これも肉体の苦患の象徴である。根はけぶるようにふるえる。その震えに「生理的の恐怖感」がある。

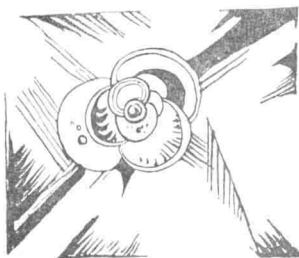
この詩の雑誌発表は「白い朔太郎の病気の顔」という標題だったが、詩集収録の時に改題したのである。また詩の終りの部分は「地面の底のくらやみに／白い朔太郎の顔があらはれ／さみしい病人の

いちめんにうすき毛をもてつつまれ—
草の茎をみよや。

雪もよひする空のかなたに、
草の茎はもえいづる。

竹

ますぐなるもの地面に生え、
するどき青きもの地面に生え、
凍れる冬をつらぬきて、
そのみどり葉光る朝の空路に、
なみだたれ、
なみだをたれ、
いまはや懺悔ざんげをはれる肩の上より、



顔があらはれ」となっていた。

「草の茎」。冬の寒さにふるえる草の茎。なんというさびしい、弱い生命の姿だろう。雪もよいの空の下にふるえる一本の草の茎。なんという衰えた生命の姿だろう。

前の「地面の底の病気の顔」がそうであったように、当時の萩原朔太郎には、生命的なものの衰えを感覚的に表現した作品が多い。この詩にあらわれた生命の姿のなんといたよりなさ。

そつと音読してみると、この詩にはほとんど濁音がない。全九十四音のうち、濁音はわずか三音にすぎない。言葉もまたひっそりとしてさびしげである。

「竹」二篇は同時に雑誌に発表された。おそらく連作風に作ったの

けぶれる竹の根はひろがり、
するどき青きもの地面に生え。

竹

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、

地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より繊毛が生え、
かすかにけぶる繊毛が生え、
かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、

たろうが、しかし二篇の性質は必ずしも同じでない。共通しているのは、二篇ともイマジスチックな作風だという点である。

前作の「竹」は、まっすぐに、するどく青く、地面に生えている。だがこれは本当の竹の形ではない。本当の竹は枝があり、笹があり、ざわざわしている。「凍れる冬をつらぬきて」という鋭い姿でもない。

それにもかかわらずこの詩は、私どもの眼に、いきなり「ますますなるもの」「するどき青きもの」を印象づける。枝や笹など、絶対に連想に浮んでこない。浮んでくるのは直線的な鋭いイメージである。竹そのものの生命である。そしてそれはすぐさま、萩原朔太郎の生命の痛みに結びつく。その「ますますなるもの」「するどき青きもの」は、感覚的に生命の痛みを